

インフラメンテ大賞の山崎エリナ氏が2冊の新写真集

道路やトンネルなどのメンテナンスを担う人をテーマにした撮影活動が2019年度のインフラメンテ大賞優秀賞に繋がった写真家・山崎エリナ氏が、建設業を被写体にした第2弾と第3弾の2冊の写真集を相次いで発刊した。北陸の四季と、建設業で働く人々の表情を重ね合わせた『Civil Engineers～土木の肖像』と、福島県内の1つのトンネル建設の全工程を追った『トンネル誕生』だ。

北陸の四季の中で

「仕事への信念や真摯(しんしん)な姿勢が表情にあらわれている」。写真集『Civil Engineers～土木の肖像』の中で山崎氏はそう記す。この写真集は、タイトルにあるように、建設業の仕事に向き合う人たちの表情をクローズアップした『肖像』を中心に構成している。

撮影の舞台は新潟県。雪の舞う12月から撮影は始まった。日本海に沿って走る鉄道敷の保守工事の現場には、身を切るような寒風が海から吹き付けていた。厳しい表情でシヨベルを動かす人たちが、休憩時には仲間と笑顔で言葉を交わす。山崎氏はそんな人たちの表情に、たぐまじさと人間味を強く感じた。

その後、春の河川工事や舗装工事、夏の災害復旧工事など、北陸の四季折々の自然の中で営まれる建設現場で、山崎氏は2年にわたって撮影を続け、「働く人の気迫

現場を担う人々に焦点

トンネル建設の全工程撮影

県川俣町を通る国道114号の泡吹地トンネル(延長2033m)の建設だ。図面のチェックから安全祈願祭、掘進、貫通、コンクリート打設、銘板取り付けまでの全工程を写した。

建設プロセスは人の目にほとんど触れない。そんなトンネルの撮影の話を持ち掛けられた山崎氏の心に生まれたのは「驚きと不安、そして大きな好奇心」だった。

そんなトンネル工事を被写体とし、照明に浮かび上がるドリルジャンボの迫力や、トンネル貫通の瞬間に差し込む外光、防水シートが輝く幻想的な空間など、工程ごとに展開するさまざまなシーンを撮影協力した。

『Civil Engineers～土木の肖像』と『トンネル誕生』はいずれも2200円(税別)で、グッドブックスから発行した。

や熱量を感じる瞬間」を追った。「一人一人にスポットを当て、人間味を引き出したかった」という。

山崎氏のシャッターは、冬の日本海や新緑の緑、春の黄昏などを背景に、現場で働く人の顔に刻まれた皺や日焼けした肌、使命感に満ちた真剣なまなこ、生き生きとした笑顔と目の輝きを肖像として切り取った。

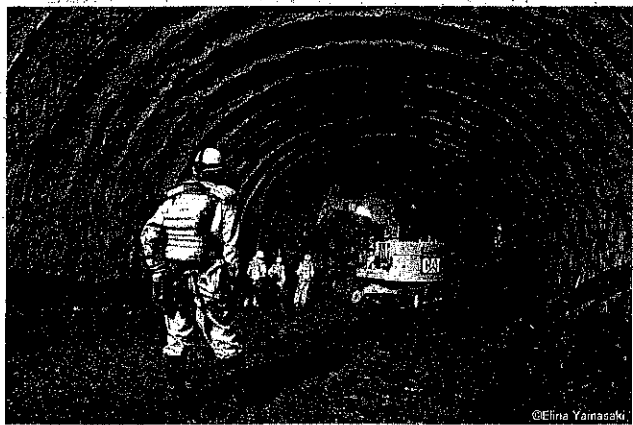
小野組(本社・新潟県胎内市)が企画協力、小野組鹿和会が撮影協力した。

展開する多様なシーン

『トンネル誕生』で撮影したのは、震災復興事業でもある、福島



休憩時、冬の日本海を背に談笑する人(『Civil Engineers～土木の肖像』より)



トンネルより大きく見えた背中(『トンネル誕生』より)